【雑想】チャングム（5）　倭寇の首領の腸癰（ちょうよう）

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

『宮廷女官チャングムの誓い』、チャングムが流された済州島が倭寇（わこう）に襲われた。時々、外国映画では変な侍が登場して、日本人が馬鹿にされている感じの時があるが、さすが隣の韓国のドラマではそういうことはなかった。チャングムは失敗から鍼を打つことに不安を覚えていて、病にかかった倭寇の首領に鍼することを拒む。それに対して倭寇の№.２は、「誰にでも最初はある」と良いことを言っている。チャングムは脅されたお蔭で、鍼を打つことに踏み切れた。そして成功し、失敗を克服した。

倭寇の首領はチャングムの診断によると、「腸癰（ちょうよう）」であり、曲池・合谷・天枢・関元・足三里のツボに鍼を打たないといけないと言っていた。「腸癰」とは腸の腫れ物で、よくあるのは虫垂炎である。

脈を診ると蝦遊（かゆう）脈だと。「エビが水面を跳ねる様な脈で、急に脈を打ったと思うと止まり、しばらくしてまた出て来る脈」で、「７日と持たない脈」と説明していた。「水面を跳ねる様」と言うと、元気そうだが、辞典で調べると、「細く静かにぼんやりとした脈の中に一瞬とびはねるように打っては消える、エビが水の中で遊んでいるような状態の脈象。七死脈の一つ。」とあった。「七死脈」は韓国ではチャングムの説明の様に解釈されているかもしれないが、日本の辞典では七種類あるから「七」となっている。いずれにしろ、かなり危ない状態を示している。

急性期の腸癰ならば、脈を深く押さえると力強く感じる脈をしているはずであるが、倭寇の首領の場合、脈や全体的な様子から見ても、既に急性期を過ぎて、全体的に衰弱している状態になっている。

曲池は肘、合谷は親指と人差指の間にあるツボである。天枢は臍の真横へ指３本分離れたところ、関元は臍の真下へ指４本分離れたところにある。足三里はスネの上部にある。

天枢に打つ場面が出ていた。お腹が軟らかそうに見えていた。急性期を過ぎて、腫れは弱まっているとはいえ、腸癰ならば、そこが腫れ物の上でなくとも、もっと堅くなっているだろう。そうしたところに、日本の細い鍼と違って、あの鍼を打てば痛いだろうと思った。私ならば手足のツボ（曲池・合谷・足三里）に先ず打って、気を引き、腹を緩め、それからお腹の天枢・関元に打つだろう。

チャングムは、治療する為に大黄（だいおう）が必要だが無いので、畑で採ってくれと倭寇を欺く。そこへミン・ジョンホらが来て、倭寇を撃退した。

通常、腸癰が急性期ならば、大黄牡丹皮湯（だいおうぼたんぴとう）が使われ、それで邪毒が減って、腫れが落ち着くと、腸癰湯が使われる。大黄牡丹皮湯には大黄が入っている。倭寇の首領の場合には、衰弱しているので、大黄牡丹皮湯はもちろん腸癰湯も使う状態ではない。ただ大黄が入った別の処方は考えられ、大黄が要るというのは嘘ではないだろう。

大黄はその名の通り、くすんだ黄色の根で、熱性の固まった毒がある場合に使う生薬である。この場合の目標は当に腫れ物である。大黄はよく下剤的な漢方薬に入っているが、その場合は固まった便が目標になっている。

（2008年５月立夏）

参考：『漢方用語大辞典』（燎原）、
『漢方養生談』（荒木正胤著）